

目的、方法、服飾史の研究において、貴族や裕福な人々など、モードのリーダーたちの服飾が中心となることが多く、庶民の服装は見落すことがある。彼らは彼らなりに各々の生活状態のなかでモードを追い、極貧の者は衣より食を優先していた。そのあり方は時代と共に変って今日にいたった。今回は、文学作品、殊に風俗研究を意図したパルザックらの写実的作品にみる人物の服飾描写を主な資料とし、さらに当時の版画や絵画を参考に、庶民の生活と意識について検討した。

結果、上流階級の人々が、雑誌のモード記事や、モード画を参考に、有名店で高価な衣服や靴や装身具をあつらえている一方で、一般市民は彼らの経済力に応じた店で衣服をつくり、古着を買って仕立て直し、染め直して身を飾った。モードの中心地パリでも最も貧しい地域では、「色あせたルダンゴットやすりきれ変色したシャツ、前時代のよれよれのフラックやキュロットの男たちや、流行おくれのローブ、染め直しの衣服、つくろいだらけのレースの女たち」が住んでいた。他方、首都から離れた小さな町の中だけで生活する人々は「過去の風習を大事にし、パリの流行品は余程検討しないと身につけなかった」が洒落気の多い若者は、晴れの場のために「町で一番名の通った靴屋や服屋で最上の品」を用意する。そして頑固な老嬢は「趣味のよい店で服を注文しながらも優雅なローブはつくらせない。」だが「木綿地の清潔なローブに変わら帽、小さな絹のショールという簡素な服装」で恋人と散歩する真面目な少女もいる。つまり、住む地域と、その人の経済力や生活意識が、その人の服装のあり方を左右しているといえる。